
「？」の童話

熊川修

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「？」の童話

【Nコード】

N9540X

【作者名】

熊川修

【あらすじ】

「この本は意味がわかりません」彼女はそう言って、かれこれ数時間は眺め続けたであろう始めのページを撫でた。全ての物には、それが生み出された意義がある。ではこの童話は何のために生まれたのだろうか。

舞台は現代、ある学校の図書室。不思議な空気の日常系作品を目指します。

1. Paphiopedilum

季節は春。四月の後半。

そろそろ翌月に待ち構えたゴールデンウィークの予定が気になり始める時期である。

赤城 あかぎ 高雄 たかおは、この春から高校二年生となった。

「だからなんだ」と質問されても困る。本人が一番、「だからどうした」という気持ちなのだから。

たしかに、所属する学年の漢数字が増えただけではないだろう。

育ち盛りの年頃。学年の平均やや上まで身長が伸び、体重も増えた。

学ばねばならぬ教科も増え、近々進路相談なんてものまで実施されるらしい。

後輩達が入学し、自分達が先輩となるのも大きい。

同級生を見れば、制服をわざと乱して着用している者、頭髪を染め始めた者など様々だ。

授業そっちのけで化粧をしていたり、ピアスにまで手を出した者もいた。

それが今の流行というやつなのか、それとも個性の追求でもしているのだろうか。

彼にとってはまるで理解できない。べつに理解したいとも思わなかったが。

赤城高雄はおそらく普通である。普通の高校二年生、男子生徒である。

漫画やアニメの主人公のように特別な能力など持っていないし、特殊な血を引いているわけでもない。

クラスの異性から大人気なわけでもなければ、いじめられっ子というポジションでもない。

生徒会役員でもなければ部長でもなく、成績は平均点よりもやや良いか悪いかだ。

ハッキリ言って、とびぬけたものがない。

だが出ない釘だからこそ、打たれなくて済むと考えればそれもまた利点か。

そんな彼にも、趣味といえるものはある。というより、それしかない。

彼は本が好きだった。

プロフィールや履歴書に趣味の記入欄があれば迷わず『読書』と書くだろう。

それ以外を書く気はない。書けそうなこともない。

しかし世間的に見て根暗であったり、おかしな人でもない。

言語的コミュニケーションはちゃんと取れる。感情が希薄だったりもしない。

赤城高雄とはそういう人間だ。

ああ、もう一つあった。

今の彼を語る上で、外してはならない要素。

赤城高雄は図書委員である。

入学してすぐ、自ら立候補し、他に希望者もいなかったためクラスで唯一の委員に。

以来、当番活動など与えられた仕事をサボったことはない。

今日もこうして、夕陽に照らされる放課後の図書室で委員会活動に務めている。

図書の整理や管理といったあらかたの仕事はとうに片付き、カウンターに座って自身も読書の最中だ。

それにしても、と。頭に浮かんだのはその言葉だった。

手元の本から視線を外し、顔を上げた先に映るのは閑散とした図書室内の風景。

彼以外でそこにいるのは女子生徒が一人のみ。

静かなため息をつき、彼は次の言葉を心の中でつぶやいた。

もう少し人が来てもいいものなのにと。

以前、『若者の本離れ』という議題で専門家達が話し合っているのをテレビ番組で見た記憶がある。

十代の学生達が、昔に比べて本を読まなくなってきたという全国的な統計データが取れたそうだ。信憑性についてはともかく、この学校でもそれは例外ではないようだ。

彼は一年の時からほとんど毎日、放課後を図書委員として図書室

で過ごしているが、本を借りていく者など皆無である。それどころか委員である自分以外、誰も来ない日がほとんどだった。

『閑古鳥が鳴く』とはよく言ったものだ。

時計を見れば時刻はまもなく午後六時。部活や委員会などで許可を貰っていないければ、以降の居残りは許されていない。

読んでいた本を閉じ、カウンターに置かれたノートパソコンを開く。

画面上に表示されているのはこの図書室の管理ソフト。バーコードによる管理で貸し出している本、貸し出し先の生徒名までマウス操作だけで調べられる代物だ。昔のようにアナログな図書カードに記入や捺印などしなくていい。

だがそんな便利なソフトも、本を借りていく生徒がいなければ宝の持ち腐れというやつで。

「……………」

管理ソフトの立ち上がり処理が終わるのを待ちつつ、カウンターの向こう側へと視線を向けた。

図書室のテーブル最奥。もはや定位置となったその場所で、彼女は本を読んでいる。

テーブルには彼女が読み終えた本がうず高く積まれている。いつも通りの光景である。

下校時刻である六時ちょうどを知らせるチャイムがスピーカーから響いた。

それを合図にテーブル上に積み上げた本をそれぞれの棚へいそいそと戻していく。そして先ほどまで手にしていた、おそらくは読み

途中であつた本とカバンを手にも、こちらへと近付いてくる。

「お願いします」

感情が何もこめられていないようで抑揚がなく、だからこそなのか透き通った声を彼女は口にした。

カウンター越しに差し出された本を受け取り、裏表紙に貼り付けられたバーコードをパソコンに読み込ませ、貸し出しの手続きをする。

返却期限は一週間。しかし彼女は借りた本を翌日には必ず返してくるから、いちいち説明する必要もない。

処理が終わった本を、またカウンター越しに渡し返す。

「どうも」

彼女は受け取った本をカバンにしまうと、無表情のまま礼を口にし、静かに図書室を後にする。

これもまた、いつも通りの光景である。

「よっ……と」

今日唯一の仕事をした管理ソフトを終了し、パソコンの電源を切る。

窓の施錠を確認して自分が読んでいた本も棚に戻し、荷物をまとめて帰り支度。

忘れ物等がないことを確認してから席を立ち、出入り口の扉へと向かう。

(……今日もあの娘だけか)

放課後の約二時間。その間に図書室へとやって来た生徒は常連である彼女だけだ。本の貸し出しを利用したのもまた然り。

嘆いているわけではない。もう慣れっこだ。

虚しくないと言えば嘘になるが、毎日通ってくれている生徒が一人いるだけでも感謝するべきだろう。

もう一度振り返り、室内に誰もいないことを確認してから電気を消す。

それまでも寂しかった図書室が余計に寂しくなったような感覚を覚えながら、扉を閉めて施錠した。

2. **R a n u n c u l u s**

今日も今日とて、放課後の図書室は静寂な空間である。

室内に居るのは図書委員である赤城と、常連の女子生徒1人のみ。あかぎ
他の図書委員どころか司書教諭ですら、ここに来るのは稀という体たらく。

彼らに同情はしないが、まあ仕方ないとは言える。

若者が読書に興味を失くした昨今、図書委員などは名ばかり。権威の落ちた役職と例えてもいい。

クラスでの希望者がおらずに押し付けられ、嫌々承諾した者がほとんどだろうし、司書教諭に至っては他の教科と掛け持ちだ。

万年閉店営業状態な現在の図書室など、せつせと足を運ぶ方が今や不思議がられるというもの。

自ら委員に希望した赤城や、今日も黙々と読書に勤しむ常連さんが例外中の例外ということだろう。

(……相変わらずだな)

図書室の状況についてもそうであるが、どちらかといえばカウンター越しに見る常連の女子生徒に対して胸の内でつぶやいた。

ここからではテーブルの最奥、いつも通りの定位置にいつも通りの様子で黙々と本を読む彼女。

いつもと変わらないはず。なのに、今日はどこか違和感があるような気がする。

……ああそうか。今日は積んでいないのだ。

今日の彼女は彼女の目の前、つまりテーブルの上に本を積んでいない。それも、一冊もだ。

いつもであれば、読破した本とこれから手をつけようとしている本とで、最低でもテーブル上に本のツインタワーが建設されているはずなのに、今日はそれが無い。

彼女はただ一冊の、手元の本にのみ『読む』という意識を集中させているようだ。本来なら当たり前の光景ではあるが、平時の彼女を知っている者としてはやはり違和感を感じる。

あまりジロジロと注目し続けるのも失礼かもしれないが、それでもついつい視線を向けてしまっていた。

いつもと違う状況も気にはなるが、それ以上に彼女自身の魅力によるところが大きい。

黄色人種としての色は残しながらも、そこに溶け込みつつ主張し過ぎない白い肌。

桃色の小さな唇は、粉雪の中で芽吹く季節はずれの花のよう。

決して切り揃えられている訳ではないウェーブセミロング気味な藍色の頭髮は彼女のうなじと両耳を隠し、襟元まで伸びたそれは朝露を眺めるような美しさ。

少しだけ目尻の鋭さがあるも、つぶらな水色がかった瞳は直視すると吸い込まれるような魅力がある。

そろそろ視線を外すことにしよう。

急にこちらを振り向き、目と目が合ってしまったては気まずい。

カウンターの内側に広げたままであった、彼が読み途中の本へと顔を向け直す。

まるで店番のようにこのカウンターに座っている間、目についた本を片っ端から読んでいるがこれで何冊目になったか分からない。最初から数えてなどいなかったが、三桁は余裕で突破しているはずだ。何の自慢にもならないだろうが。

そういえばと、ある疑問が浮かんだ。
彼女の名前はなんだったかなと。

それほど重要な疑問ではないだろうが、気になってしまっただけではない。

傍らに置かれ、スリープ状態となっていた備品のパソコンへと手を伸ばす。

本日もまったく出番のなかった、図書室の管理ソフトを立ち上げる。『窓際族』と揶揄されても反論出来ない不遇な使用頻度だ。アナログ手作業での貸し出し処理でも問題ないんじゃないだろうか。

くだらないことを考えているうちに、管理ソフトの準備が終わる。すぐさまマウスを操作。カーソルを『貸し出し履歴』の欄で左クリック。

探す手間もない。自分が入学してからこの図書室の本を借りていった者など、2人しかいないのだから。

自分ではない方の名前をクリックする。

彼女の氏名、学年にクラス、ここ最近の借りていった本の題名が表となって画面に表示された。

きりしま
あさひ
(霧島 朝日……ね)

一学年のDクラス。出席番号は……どうでもいい。
彼女が図書室の常連としてここに通い出したのは今年度に入って

からだか、やはり後輩だったか。

委員特権もこの程度にしておくでしょう。

どこぞの捜査官じゃないのだし、これ以上私的な探究心から個人情報を見つからなければ犯罪にはならないとはいえ、程度というものがあるのだ。罪悪感だって少しは感じる。

画面のウィンドウを閉じるのとほぼ同時に、スピーカーから下校時刻のチャイムが鳴った。

数分も経たないうちに、彼女は今手にしている本を持ってこちらに来るだろう。

そして眉をピクリとも動かさずにあの言葉を口にするはずだ。

「お願いします」と。

管理ソフトを貸し出し受付画面へと移行させて準備は万端。

あとは彼女が本を差し出し、自分はそれを受け取っていつもの処理を行うだけ。

そこまでが予定調和。いつでも来いよこの野郎な待機状態。

だがしかし。

(……?)

今日という日はそれまでどこか違っていた。彼女の行動が、いつもと違う。

というか、彼女が行動を起こす気配がない。どうということなのだ。

「……………」

その間、およそ5分。男子であればお手洗いすら済ませられそうな経過時間。

カウンターの途中でじっとして待っていたが、一向に彼女が席を立つ様子が無い。

それどころか手元の本から目を離そうとしない。熱心に読みふけている。

いや、よく見れば彼女はページをまったくめくっていなかった。同じページを開いたまま、ジッと凝視するように見つめ続けている。よほど興味深い一文でも載っていたのだろうか。

埒が明かないと判断し、彼女の元へと向かう。
まずは先制攻撃だ。後ろに立ち、咳払いを一つ。

だが彼女は振り向かない。

こちらの軽いジャブなど気付かないくらいに没頭しているのか。先ほどのチャイムにしろ、聞こえないほどに。

次に行こう。その華奢な背に向けて「あの、すみません」と声をかけた。

言語的コミュニケーションだ。礼儀は大切。

やはり彼女は振り向かない。

難聴という単語が頭をよぎった。なにをそんなドラマティックなもしわざと無視されているのだとしたら、それはそれで傷つく。

最終手段だ。

肉体的に触れて気付かせることにした。変な意味ではない。とはいえセクハラ扱いされても困るので、人差し指で彼女の肩を

叩く程度に抑えた。トントんと。

「はい？」

彼女はようやく振り向いた。

意図せず視線がぶつかり、その顔に思わず魅せられそうになる。美少女と言って差し支えないであろう目の前の少女。

恋の相手募集中な男子であれば、一般的な基準からして彼女に一目惚れする確率はかなり高いものだと思われる。

見つめているのか、見つめられているのか。それすらも曖昧になりそうだ。

「なにか？」

いかんいかん。用件を言わなければ。

密かな緊張が表に出ないよう装いながら、既に下校時間を知らせるチャイムが鳴ったことを彼女に告げた。

3. Poinsettia

「気が付きませんでした。もう六時でしたか」

三度目の正直で彼女はようやく振り向いてくれ、先ほどのチャイムにすら気付かなかったことを訴える。

壁に掛けられた時計で現在時刻を確認し、彼女は席を立つなり頭を下げた。

「すみませんでした」

「あ、いや……べつに誤ってくれなくても」

こちらとしては下校時間を越えたからといって叱る気など毛頭ない。生徒会の連中はうるさく言うだろうが、多少の時間オーバーくらい大目に見たっていいじゃないかと思う。

「あなたが気付かせてくれなかったら、私は明日の朝まで気付けなかったかもしれません」

……どうやら声をかけて正解だったようだ。

いくら図書委員とはいえ、さすがにそこまで我慢比べ出来る自信は無い。

「ま、まあそれはいいよ。生徒会の見回りもまだ来ないだろうしさ……それよりその本、借りてく？」

借りていけというつもりで言ったのではない。彼女なら途中まで

読んでいたその本を当然借りていくだろうという予測、ある意味経験則からの発言である。ご丁寧に本を受け取るため自分の右手まで差し出して。

しかし彼女は表情を少しも変えず、ただ一言。

「困りました」

即座に「はい？」と聞き返しそうになった。この状況で一体何に困ったというのか。

それに困ったと口に行っているわりに眉一つピクリともしていないのですが。

「つかぬ事を伺いますが、あなたは図書委員ということで間違いないでしょうか」

「はあ……まあ、一応そうですね」

思わず敬語になってしまった。

ついでに「今まで俺が貸し出しの手続きしてたじゃないですか」というツツコミも入れ忘れた。

これまで会話らしい会話などしたことが無かったが、こんな雰囲気を持つていたのかと思い知った。

まるで冷たい壁に話しかけられているような感覚を覚える。

だってこの娘、可愛い顔してくるくせにさっきからずっと無表情なのだ。動いているのはまばたきをする^{まばた}瞼と、言葉を発する度に小さく開かれる口だけ。

実は感情を持たないアンドロイドとでもいうんじゃないだろうな。

「では図書委員であるあなたにお願いしたいことがあります」

そう言うとな彼女は手にしていたその本を、こちらへと差し出した。片手で投げやりにはなく、両手を伸ばして渡そうとしている姿に、小動物にも似た愛らしさを覚える。

「えっと……借りるの？」

「いえ。借りてほしいのです」

どういうことだ。日本語がおかしくないか。

確かに自分は少し、いや一瞬だけその本の内容が気になったのは認める。

だがその瞬間だけ。どうしてそこまで同じページを見続けていられるのかという興味からだ。

現在の途中読者である彼女を差し置いて、自分が先に借りたいとまで思った覚えは無い。

それとも無意識にそんなニュアンスの表情をしてたともいうのだろうか。

「ただもう一つお願いがあります」

先ほどの発言について問うのは後でもいいとして、まずは彼女のさらなるお願いとやらを聞いてみることにした。

「この本の中は見ないでほしいのです」

ますますどういうことだ。

貸しておくけど中身は見るなどか、どんな拷問だそれは。訳が分からなくなり、さすがに質問で返すことにした。

「えーつとさ……まず、なんで俺がこの本を借りるの？」

「私が借りられないからです」

意味がわかんねえよ。

図書室ブラックリストにでも載ってるんですかあなたは。

「……読みたいんじゃないの？」

「はい。ですが、私は借りられません」

なんだその不自由。

さらに質問を投げかけたかったが、この話はお終いと言わんばかりに胸元へその本が押しつけられた。

黙って受け取れということなのだろう。

「あなたに理解されるまで説明したいのですが、残念ながら今の私には時間ありません」

「はあ……とりあえず俺はこの本を借りていつて、読まなければいいと」

「その通りです。お願いします」

丁寧に頭は下げるが、相変わらず彼女の表情に変化は見られない。どんな事情があるのかは知らないが、とりあえず借りておいてやるかと思った。

彼女の雰囲気は圧され、そう思われたというのが正しいかもしれないが。

「わかったよ……じゃあ借りておく」

「助かります。明日の放課後もあなたはここにいますか？」

「まあ、図書委員だし。放課後には毎日いるよ」

「では明日の放課後に詳しく説明します。今日はこれで」

小さく会釈をしつつ「失礼します」の挨拶を最後に、彼女は早歩きで図書室をあとにした。

図書室は瞬時に静寂な空間へと変わる。

よく分からない理由で本を押し付けられた男子学生が一人いるだけ。

なんだか取り残されたような気分だ。

デート中に破局したカップルの片割れはこんな心境なのだろうか。経験ないけど。

「……帰るか」

その場にたたずんでも虚しいだけだと感じたので、さっさと帰ろうとした。

その前にこの本の貸し出し処理だけしていかなければならない。受け取った本はB5サイズ程度の大きさ。

一般的な小説ほどの厚みはなく、どちらかというと絵本や児童書の類といった方がしっくりとくる。

「……あれ？」

違和感に気付いたのは、パソコンにバーコードを読み込ませようとした時だ。

この図書室にある全ての本、その裏表紙に貼り付けられている読み取り用のバーコードがその本にはなかった。

おかしい。

去年の年末、図書室内にあった本は全てバーコードのチェックを行ったし、その後に入ってきた本だとしたら尚更だ。どちらもチェックし、バーコードの新規作成と貼り付けを行ったのは他ならぬ自分なのだから。

ミスがあったという可能性も捨てきれないが、さすがにそれは無いだろうと自分に言い聞かせる。

図書室の貸し出し本であるという目印は背表紙のバーコードだけではない。

本の背表紙には小さなシールが貼られているはず。

このシールに記載された平仮名と数字を元に陳列する棚を分け、またそこに戻しているのだがこの本にはそのシールもない。

そもそも毎日のように図書室内の様子を見てきているのだ。

シールの貼られていない本が棚に置かれて、今日までそれに気付かなかったというのもおかしい。

おまけにこの本には著者、作者の名前が記載されていない。

表紙にも、背表紙にも、もちろん裏表紙にもだ。

普通ならその本の一番目立つ部分に、主張しすぎない程度に記載するものだろうに。

おかげでこの本の外見から知ることが出来るのは、この本の題名

だけである。

あまつさえその題名すらよく意味がわからないという謎の本だ。
思わず表紙を開き、中の様子も^{あらた}検めてみたい衝動に駆られたが、
そこはグツと堪える。

(……まあ、明日聞けばいいか)

彼女からの要望の一つ「この本の中は見ないでほしい」というのが、一種の抑止剤のように働いた。

一方的な約束とはいえ破るのには多少なりとも罪悪感が付き纏うし、もし中を見たことが彼女に発覚したとして、あの無表情プラス透明ボイスで問い詰められたら変な汗が噴出しそうだ。

状況が違えば見つめられるだけでありがたくなりそうな程の可愛らしい顔だというのに。

ああもったいない。

とにかくバーコードがない以上、この図書室の本であるかどうかは怪しい。

そして残念ながら、今日のところはそれを確かめるだけの暇がない。

もうしばらくすれば、生徒会の見回り連中がやって来て小言のマシンガンを浴びせられてしまうだろう。

そうなる前に校舎から退散しておかなければ。捕まったら最後、面倒な事この上ない。

イレギュラーな事態ということで貸し出し処理はスルーして帰ることにした。

相変わらず仕事をする機会にほとんど恵まれないパソコンの電源

を落とし、照明を消して扉を施錠して図書室を後にする。
手にしていた本の表紙をもう一度見て、やはり無意識に首を傾げ
てしまう。

『「？」の童話』

それが、表紙に記された唯一の文字。
始まりのきっかけになった、この本の題名だった。

4. Lily of the valley

翌日の放課後。

帰りのホームルームもつつがなく終了し、教室を出た足でまっすぐ職員室へ向かう。

べつに個人指導を受けたり進路相談をしたいわけじゃない。理科室や音楽室といった特別教室の鍵は、職員室に保管されているからだ。

当然、これから向かおうとしている図書室の鍵もここにある。いつも通りそれを借りに来たわけで。

「失礼します」

ノックを三回。扉を開け軽く一礼してから室内へとお邪魔する。放課後すぐという時間帯もあってか、室内にいる教員は数名だった。

「図書委員ですが図書室の鍵を借りに来ました」

いくら自分が善良な一般男子生徒だからといって、用件を済ます以上に長居はしたくない。

テンプレート通りの挨拶をし、扉のすぐ横に掛かっている鍵を拝借。

退室の挨拶をして扉へと手を伸ばしたときだった。

「おーいタカちゃん。ちょっとちょっとお」

捕まってしまった。それも一番捕まりたくない相手に。

ため息を吐きつつ呼び声のした方へ目を向けた。

室内にいくつも並ぶ、教員たちの机。そのおよそ中間にその人物の机がある。

文字通り山積みになっている雑誌やら教科書やらプリント類の向こう側から伸びた右手。

こちらの姿が見えているんだかいんだか。手首をゆるく稼働させ、おいでおいでのジェスチャー。

仕方なく声の主のもとへ移動するとやはりというべきか。

ノートパソコンを枕代わりに、部活動で疲れた生徒でもここまではならないだろうグダグダな体勢の美女が一人。

「……なんですか先生」

「んもー。タカちゃんてば硬いぞお？ いきなり用件聞くんじゃなくて、まずは世間話から入るとかしないと女ウケ悪くなるぞー？」

「……今のところ、そんな予定はないですから。っていうか相変わらず酒臭いですよ」

居酒屋から出てきたところだと言われても疑われないであろう、アルコールの混ざった吐息を撒き散らしているこの人物。

なんとこの学校の教員である。いや本当に。

「ちよつとおー？ うら若き乙女に、いきなり臭いとかヒドくないっすかういーっぷ」

「若いつてのは否定しませんが、酒臭いのは事実っていうかお願いですからここで吐かないでくださいよ？」

「はっはっは。酒は飲んでも飲まれるにゃーってか？ はっはっは」

「……授業中にでも飲んだんですか？」

「いんやー？ さすがに授業中は我慢したんだニャンニャンニャンゴロー。にゃっはっは」

ああ駄目だ。

日本語になってないよこの人。

「いやはや聞いてよ？ 昨夜ちょっと飲んだらさ、朝起きたら気分わりいーのなんの。そんでもさっきまでは頑張ったんだけどさ、どーにも気分すぐれねえってもんでコイツを一气したわけさあ大佐」

この人が「ちょっと」ということは、小さな居酒屋なら店内がカラッポになる位は飲んだんだろうなと想像しつつ、傍らに転がっていた酒の空き瓶を拾ってみる。

っていうかパッケージにドクロ描いてあるんですけどコレ。

「アルコール度数86%って……火つきますよこれ」

「んー？ やっぱ90パーは越えてないとねえ。楽しめないよねえ」

迎え酒ってレベルじゃねえぞ。

体内に何ガロン溶け込んでんだこの教師は。

「どーせアンタこれから図書室だろお？ ついでに一本買ってきておくんなまし。適当なラムでいいからさあ」

「買いませんし買えません」

「りょーしゅーしよの金額欄は白紙でよろしくー」

「聞いてないし……」

教員ですと紹介したらどこぞの団体のお偉いさんが発狂しそうなこの酒浸り美人教師。

名を、加賀^{かが} 音羽^{おとほ}という。

三十路より少し手前……と、本人は豪語する美人教師。

美人と連呼しているがどの程度美人なのか。

たぶん街角アンケートを行えば、十中八九美人だと認定されるだろう。

赤い薔薇のような超ロングヘアー。

ちょこつとはねた寝ぐせらしき前髪もチャームポイントの一つ。

スタイルだっていい。

ハイヒールいらすの身長に見せびらかすようなバストとヒップ。モデルにスカウトされたこともあるらしいが、スカウトがいやらしい視線で見てきたからブツ飛ばしてやったとは本人談である。

そして彼女の最大と言ってもいい魅力に、非常に女らしい外見で

ありながら女らしくしていない中身だろう。

竹を割ったような、悪く言えばオッサンっぽい性格。並の男より男らしいかもしれない。

だけどそのミスマッチさが不思議な魅力となり、彼女の虜となる男子生徒や男性職員も後を絶たない。

「レディーカガ」なんて呼ばれ方をしていたのも聞いたことがある。

秘密のファンクラブまで設立しているという噂だ。興味ないけど。

今こうして酒に溺れている姿はいつもの事なのでとりあえず置いておいて。

一応は史書教員である。要するにこの学校の図書室のボスである。一応というのは他の教科と掛け持ちだからだ。

真っ白なロングコートもどき……もとい、白衣という姿を見れば一目瞭然なのだが化学の教員でもある。

本人は日々怪しい実験を化学準備室にて行っており、よく爆発音が聞こえてくるとか。

「ボマーカガ」なんてあだ名も聞いたことがある。

とにかく、美人ではあるが日々酒浸り。

迎え酒の迎え酒を繰り返し、水の代わりにアルコールを摂取している、危ない化学教師とも言っておこう。

よくクビにならないものだと感じるが、本人曰く「働きやすい職場は自分で作るべし。そのためには上司の弱みを握るのが手っ取り早い」とのこと、まあ色々と握ってるんだろう。詳しくは知らないほうがいい気がする。

「用件はそれだけですか？　だったらもう行きますよ」

「なんだぁーよ。つれないねえ。せつかくたまには図書室に顔出してやろうかと思ってたのにさー」

「せめてアルコールが抜けてから来て下さい。図書室に酔っ払いはカンベンですよ」

「へいよぉー。んじゃ、あたしやぁもう少し寝ますかねーつと…」

これが彼女の平常運転である。
つていうか枕にしてるノートパソコンによだれ垂れてる。大丈夫かそれ。

「あー。タカちーん？　ついでにスモークチーズもお」

「……買ってきませんってば」

こうなると引くが得策。

さっさと挨拶を済ませ、酒臭い職員室を後にする。

施錠されたままの図書室の前には、既に常連さんが一名。
置物のようにちょこんと立って待っていた。

5. Streptocarpus

開錠されるまで図書室の扉前で待っていた常連の女子、霧島朝きりしま あ日。さひ

近付いてくる足音に気付いたのか、振り向いてこちらを見つめる……相変わらず綺麗だが無表情な視線。

「ごめんごめん。遅くなって……」

「いえ」

図書室の開錠が遅くなって申し訳ないという姿勢をとりあえず見せるため、謝罪しながらカギを回して扉を開ける。
返ってきたのは何の感情ももっていないとしか思えない、いつも通りの端的な返事だったが。

「ちょっと先生につかまっちゃって……もしもし？」

「はい」

扉を開けて室内へ。

喋りながら三步ほど進んだところで俺は振り向いて尋ねた。いや、尋ねてしまった。

「……入らないの？」

「入ります」

ならば何故、扉が開く前に立っていた位置から一步も動かんのだ。

「考え事をしていました」

「はあ……」

「あなたの顔を見たら、ふと疑問が浮かびまして」

「……どんな？」

「ハムスターはなぜあんなに回し車に夢中になれるのでしょうか」

知らないです。そんなの。

俺の顔を見て、どうしてそんな疑問が浮かぶの？

ハムスターみたいな顔ってこと？ 回し車みたいな顔ってこと？
それ人間の顔か？

「冗談です」

ああ良かった。

その言葉で少しだけ報われたような気がするよ。顔面的に。

「その疑問が浮かんしたのは、あなたが来る前です」

ハムスターと回し車の謎については、実際に考えてたのか。

って、この娘でも冗談は言うのね。

お兄さん、てっきりロボットみたいな性格かと勘違いしていたよ。

「家の者から、たまには冗談の一つでも言ってはどうかと言われるので、試してみました」

うん。やっぱりお前の中身はロボットか？
驚かないぞ。そんな超SF展開が来ても。

「では失礼します」

ちょこんと可愛らしい会釈をしつつ、彼女も図書室内へ。
もちろん表情に変化は微塵も見られなかったが。

そしていつもの……もはや彼女の指定席となった、テーブル最奥の席へ。

俺はその様子を横目に、カウンターの奥へカバンを置き、ノートパソコンの電源を入れる。

「……あつ」

そこで思い出した。忘れてはいけない用事。
少しだけ慌ててカバンを開き、中から一冊の本を取り出す。

「……はいこれ。返すよ」

彼女の前、テーブルの上にその本を置く。

『「？」の童話』

昨日の放課後、この場所で彼女から預かり、借りて帰った本だ。
彼女は「どうも」と、たった三文字の感謝の言葉を口にし、本をそっと手に取る。

「一応聞いておきますが」

凜としてやや鋭く、それでいて熱のない視線が向けられる。
目を逸らしたくなつたのは気のせいではないだろう。

「この本、中を見ましたか」

少しだけたじたじになってしまった。
だって取り調べみたいな雰囲気が漂つたんだもの。

「……見てない」

「そうですか」

その受け答えだけで、彼女は再び視線を手元の本へと戻した。

えっ、それだけですか？

もっとこう、疑うとか問い詰めるとかしないの？

「私には確かめようがありませんが、平然と嘘をつくなら、あなたはその程度の人だというだけです」

ああそういうことですか。

ホントのこと言って良かったよ。

「それに、読んだところでおそらくは意味がわからないと思います」

俺にはあなたの発言の意味がわからないけどね。

カウンターに戻って、いつも通りただ本を読むだけの図書当番に戻ろうかと思っていた矢先。

目の前の少女はカバンの中に手をつ突っ込んだかと思うと、なにやらかわいげな小袋を取り出してこちらへと差し出す。

「……なに？ 爆弾とか？」

「自爆する気も、その予定もありません」

彼女の手からその袋を受け取る。

中身はクッキーのようだ。裏にそう書いてあるし。

「お口に合うかわかりませんが、お礼です」

「はあ……どうも」

おそらく昨日から今まで、その本を預かっていたことへのお礼だろう。

というかそれ以外見に覚えがないし。

とりあえずお礼を言っておりがたく頂戴しておく。好意をむげにするのも何なので。

さてどうしたものか。

彼女はすでに本を読み始め、開いたページに夢中な様子だし。どこか手持ち無沙汰な雰囲気になってしまった。

そうだと思い立ち、おもむろにカウンターの奥の部屋、司書室へ。

カップを二つ用意、皿を一つ用意しテーブルの上に用意する。

棚に常備してあるインスタントコーヒーとコーヒーミルクの粉をカップの中に。

それから受け取ったクッキーを皿に。

うん。やはり一人で食べるにはちよつと多い量だ。

図書室へと戻り、彼女に声をかける……が、無視された。いや、無視じゃなかった。

昨日と同じく、あの本に夢中になっていただけだ。

こうして肩をつつけば振り返ってくれたし。

「なんででしょう」

ああ、だがやはり無表情。

つくづく勿体無いと思う。顔はいいのに。

「さっき貰ったクッキーだけどき、一人だと多いし、一緒にどう？
って思ってた……」

予想通りだが彼女は即答しない。

けどもうちょっと粘って誘ってみる。クッキーとは別に、彼女に聞きたいこともあったし。

「コーヒーもいれるしさ。それに……その本のこと、まだ説明されてなかったし」

開かれたままの本を指差す。

そう。これについて聞きたかったのだ俺は。

「そうでしたね」

やっと彼女から答えが返ってくる。
だけど、少しだけ考え込む顔を見せて。

「いいのでしょうか？」

「……それはどっちの意味で？」

「おそらく両方です。あなたに差し上げたお礼に私も手をつけて
いいのかという事と、図書室での飲み食いをしているのかという」

「ここは今日も閑古鳥。来る人なんて生徒会の見回りくらいで、
それにはまだまだ時間があるし……」

俺はまず時計を指差し、次に背後へ向けて親指を立てて、言った。

「図書室での飲食は禁止だけど、司書室なら問題なし。もう一つ
の疑問については、ノープロブレム。っていうかウエルカム」

「そうですか。ではお言葉に甘えることにします」

彼女も無事承諾し、司書室での小さなお茶会が決定した。
これも委員特権というやつだ。

「ここは酒場ですか」

司書室に入るなり、彼女は質問をぶつけてきた。
まあこの部屋の状況を見たらその疑問は当然だろう。
そこら中に空の酒瓶やらグラスが転がっているんだから。
そろそろ掃除しないといけないかもな。

「未成年者の飲酒は法律で禁止されていますが」

「残念ながら俺は下戸だよ。この部屋のボスがね……まあそのうち分かる日がくると思うけど」

「そうですか」

背を向けてポットを持ってくるまでに彼女は椅子に座っていた。まったく音がしなかったのは礼儀正しさの表れか、はたまたそういう特殊能力か。まあ前者だろうけど。

「……ほい。砂糖はご自由に」

コーヒー入りのカップと、角砂糖の入った瓶を彼女の前に。

「ありがとうございます」

礼儀正しくお礼と共に一礼。

瓶の蓋を開き、角砂糖をつまんでコーヒーの中へ入れる入れる入れる入れる入れる入れる入れちよっと待て。

「それ……飲むの？　っていうか飲めるの？」

「はい。私、甘党なので」

にしたって限度ってものがあるだろ普通。だってほら。コーヒーの水面から角砂糖のタワーがコンニチワしちやってるし。

「ではいただきます」

「はあ……どうぞ。クッキーもね」

「いただきます」

砂糖満点なコーヒーを飲みつつ、クッキーにも手を伸ばす彼女。健康的な面と味覚的な面で心配になるこちらをよそに、普通に食べ進めている。

だけどやっぱり眉一つ動かさない。
満足なのかどうかわからないですよこれじゃ。

「おいしいです」

あ、彼女の口には合ったみたいだね。
一安心したところで自分もクッキーに手を伸ばす。うむ。なかなか良い味だ。

「……ところで、その本についてなんだけどさ」

そしてコーヒーを飲みつつ、本題について切り出してみた。
こちらはブラックだ。彼女のマネなんかしたら、確実に死ねる。

「ええ。詳しく話すんでしたね」

「……覚えておいてもらえて助かるよ。昨日の、あの後に聞いたことも増えたし」

「そうですか。ではどこから話すのでしょうか」

「とりあえずそうだな……最初から……その本との出会いから？」
質問項目はいくつかあったが、とりあえずそこから彼女に語ってもらおうとしよう。

全部質問し、答えてもらおうという前提で。

「むかしむかしあるところに」

そこからですか？

っていうか日本昔話の登場人物ですかアンタは。

「お兄さんと弟と妹が」

なにその組み合わせ。

くやしいけどちょっと先が気になるんですけど。

「というのは冗談です」

ああ。まだ試してたのねそれ。

「……冗談はヌキで頼みたい」

「わかりました。真面目に話すことにします」

彼女の表情は変わらない。

だけどころとだけ残念という顔をしていた、ような気がする。

「この本はこの図書室で見つけました」

そして彼女は語り始めた。

『「?」の童話』という本について。

6. Mirabilis

作者名の記載がない『「？」の童話』という名のこの本。

それを大事そうに抱える後輩、霧島きりしま朝日あさひは「この図書室で見つけた本」だという。

「……でもバーコードないよね？ その本」

「はい。それは私も気付きました」

この図書室に置かれている本ならば、図書委員……といってもほとんど自分だが、貸し出しの際に読み取るバーコードが貼られているはず。

しかしこの本にはそれがない。

ということは、学校図書ではないということだろうか。

「読み出す前に確認しましたが、本の中にもバーコードはありませんでした。それから、作者名も」

「ほんとにタイトル通りの謎な本だな……でもそんな本、どこの棚にあったんだ？ 今まで全然気付かなかったけど」

「いえ。テーブルの下に落ちていたんです。拾ったのは昨日でした」

「じゃあ昨日初めて読んだ……と」

「はい。誰かの落とし物か、忘れ物だと思ったので拾っておいたのですが、好奇心に負けて読み始めてしまいました」

まあたしかに、こんな本拾ったら中を見たくなるよな。

俺も昨日、ついついページを開きかけたり危なかったし。

「これが図書室の本じゃないってのはまあいいとして……なんで俺に預けたっていうか、借りさせたの？」

「それについては落とし物として申告するべきだったのではないかと今になって反省しています」

「いやまあ……そんな個人指導みたいなことは望んでないけど。自分で借りていけば良かったんじゃないのかなあって」

「私の性格からして、そうするべきではないと判断したので」

「……どゆこと？」

「その説明については、まず私自身について話すことになるのですが」

これから話し始めるんだぞという合図なのか意気込みなのか、彼女はカップにわずかに残ったコーヒーを飲み干す。

っていうか飲み干したカップの底に砂糖が沈殿しまくってるんですけど。

まるで砂金採取みたいだ。よく飲めたなそれ。

「突然ですが、私の趣味は読書です」

うん。知ってます。

というよりこんだけ毎日ここに来て、読書が趣味じゃありません
だったら逆に驚くよ。

「私は一年生なのですが、今年中にこの図書室に置かれている本
は全て読破するつもりでした」

そりゃまあ、毎日あのペースで読んでればそれが妥当な目標だよ
など納得した。

夕陽を浴びつつ、テーブル上に大量の本を積んでいた彼女の姿を
思い出す。

「一冊程度なら家に帰っても読み終える時間があるので、それで
毎日借りていました。しかし、です」

「……しかし？」

「この本が立ち塞がりました」

待て待て。さっぱりわからん。

これは俺の読解能力が低いせいかな？

「私は一度読み始めると、その本の続きがどうしても気になるタ
チです」

「……多くの人がそうじゃないかと」

「今まではよかったというか、セーフでした。たとえば読み途中の
本があったとしても、優先順位の高い習い事などには集中出来てい
ました」

「……はあ。この本は違っていたとでも？」

「はい。違っていました」

彼女はひざの上に置いていたその本を、テーブルの上に。
そして眺める程度に最初の見開きページを開いた。

「この本は意味がわかりません」

目の前の少女はそうつぶやき、かれこれ数時間は眺め続けたであ
ろう始めの見開きページを撫でた。

「……読めなかったってこと？」

「いえ。読むこと自体は至極簡単です。全て日本語ですし」

「じゃあ、何がわからないと？」

「存在する意味です」

「存ざ……意味？」

「はい」

なんですかそれ。

なんか急に話が難しくなったような気がするんですけど。

「ええっと……そんなこと考えないといけないのか？」

「いけないことはありませんが、重要だとは思いますが」

はあ。そうなんですか。

よくわからないけど。

「たとえばですが」

彼女はテーブルの上に二冊の本を置いた。

ついでに説明を始める前にクッキーを一枚食べて。

「こちらが辞書、こちらが小説です。それぞれに存在する意味があると思いますが、わかりますか？」

「……調べるのに使うのと、読んで楽しむため」

「おそらくですが、それで正解だと思います。ですが、この本からはそういった意味が見つかりません」

「……そうなの？」

「そうなのです」

そんなこと考えながら読むなんて、今までしたことがない。

だって、おそらくは決まりきってることだろう。

辞書は、何かを調べ、詳しく知るために。

小説は、そこに書かれた物語を楽しむために。

そうやって読まれるために、それらの本は生み出されたはずなんだから。

「この本なのですが、表紙から読み取るにこれは童話のはずです」

「うん。表紙にそう書いてあるもんな」

「では尋ねますが、童話の存在理由とは？」

また難しい質問ぶつけてくるなこの娘は。
そんなこと考えたことはなかったと思うが、仕方なく即興で検討してみる。

「……こ、子どもが読む、もの」

「それだけですか？」

「大人も読むか。あ、でも子どもが主な読者で……」

「童話という物は、主に幼児期の子どもが言葉と文字を学び、善悪の判断等の情操教育であったり美的感覚や想像力や価値観を育て、また親子のコミュニケーション手段としても使われるというのが、一般的なイメージだと思われます。最近では、大人に向けたジャンルとしての童話も出てきていますが」

「……………」

なんか俺が馬鹿みたいじゃないか。
一年上の先輩だっていうのに。

「ですが、やはりこの本は意味がわかりません。そうした目的で作成されたとも思えないのです」

「……まあ、その本が意味わからんってのはわかった。んで、なんで俺に？」

「この本を借りていつてしまったら、私の生活ペースが狂ってしまふと判断したからです」

「それぐらい面白いってことか？」

「面白いというより、興味深いといったほうが。謎の古代文字に挑む学者とでも例えましようか。日本語として読めるぶん、こちらの方が簡単ですが」

「……あー。なんとなくわかった。読めはするけど意味がわからないから、こういうことか気になるってことか」

「その通りです。昨日の放課後はこの本を読むことだけに費やしていましたが、さっぱりでした。ですが、そのぶんだけ夢中になってしまいます。下校時刻や、あなたの呼びかけにも気付かないほどに」

たしかに下校時刻にも気付かずに読書続ける彼女の姿は昨日はじめて見た。

とはいっても、彼女がここに通うようになってから二十日程度ではあるが。

「借りて帰れば確実に生活を犠牲にしています。しかし図書室に置いておけば誰かが借りていつてしまうかもしれません。そこで、毎日カウンターに座っていたあなたに預かってもらうという形でお願いしたわけです」

「そういうことだったのね……」

「何か、他の理由を想像していましたか？」

「……べつに」

謎の文学系少女から受け取った本が魔力を帯びていて、秘められた力が目覚めたりだとか。

実はこの本は重要な財宝で、それを狙う悪の組織に狙われるハメになるだとか。

そんなファンタジックな妄想はちょっとしかしてなかったです。はい。

「私からの説明は以上です。なにか質問があれば、どうぞ」

「んー……いや。とくにこれといっては」

「では私は戻ります。コーヒー、ごちそうさまでした」

彼女は表情以外は丁寧な動作でお礼をする。

顔を上げた後、その視線は皿の上に一枚だけ残ったクッキーを見つめていた。

「……食べていいよ」

「いえ、そんなわけには。これはあなたへのお礼の品ですし」

「俺も十分食べたからさ」

「それを言ったら、私なのですが」

「いーよ。遠慮しないでも」

「いえ。やはりここはあなたが」

日本人にありがちな遠慮の押し合い合戦。

このままじゃ埒らちが明かないと、彼女もそう判断したのだろう。一つの提案をしてきた。

「ではジャンケンということではいかがでしょう」

「そうしょうか」

ナイスだ。いい提案だ。

ジャンケンとしては争うことになるが、残り一枚のクッキーを巡るという状況では極めて平和的な解決手段だろう。

「では五十三回勝負で」

「食べちまえよ……めんどくさい」

「それは棄権負けということでしょう」

「はいはい。降参ですよーさん」

「では遠慮なく」

実は食べたかったんじゃないだろうか。彼女は最後のクッキーを、その小さな口へと運ぶ。

その時の彼女の表情が少しだけ柔らかく感じたのは、きっと気のせいだと思うけれど。

彼女との初めてのお茶会は、こうしてお開きとなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9540x/>

「？」の童話

2011年11月4日20時01分発行